

幽玄

題字

高秀信横浜市長

横浜能楽連盟

会報 No.13

平成9年6月7日



能楽連盟の進むべき道

会長 新堀 豊彦

明平成十年七月で、当横浜能楽連盟は結成（再興）五十年を迎えることとなります。

昭和二十三年（一九四八年）戦後三年目にして、当時の先覚者、能楽謡曲の愛好者は立ち上がり、連盟を発足させたのであります。強力なリーダーシップを発揮されたのは観世流の中村桃山氏でありました。

その頃はまだ戦後の荒廃混乱期の真っ只中であり、大空襲の焼跡や駐留軍の接収地が、横浜市内に至る所にみられ、食料も、衣類も住宅も不足していた時代でありますから、伝統芸術の愛好者の集いを開催することなど、容易に考えられないような雰囲気であったと記憶します。

今考えれば、奇跡のような復

活であり、能に対する横浜の愛好者の驚くべきバイタリティと執念を示す出来事であったということが出来ると思うのであります。

そして昭和二十八年には、連盟と横浜市教育委員会の共催により、第一回「横浜能」が国際文化会館の仮説舞台で開催され、以来四十五年間、一回の休みなく、五流の一流の演者によって、横浜能は続けられ、その間、横浜新能、掃部山新能も行われるようになり、久良岐能舞台の開設から、昨年六月二十八日の「横浜能楽堂」の記念すべき落成となり、横浜の能楽界はまさに全盛期を迎えることになったといえると思います。

横浜能楽堂は現在、順調な活動を続けており、演能は常に満席状態であり、入門講座を募集すれば定員の三倍以上の申し込み者が殺到するという盛況を見せています。

私たちアマチュア愛好者も、染井以来の伝統と歴史のある舞台、入念かつ豪華に造られた見所や楽屋で、十分に楽しませて

頂いており、至福の時代を享受していると申してさしつかえないでしょう。

即ち外見上はめでたしめでたしという状態で、私も昭和六十年以来つとめさせて頂いております会長としての役割も、ピリオドをうたせて頂いても一向におかしくないような現状であります。

しかしながら、私たちのおかれています客観的状況は、決して楽観しえないものがひそんでいることを認識すべきであると思います。

それは連盟を支えている能楽謡曲の愛好者、稽古をしているアマチュアの老齢化現象と、稽古をしようとする若い世代の減少傾向に、明確に現われて来ているといえるでしょう。

能を楽しむ、関心をもつ、幅広い能楽ファンの層はかなりあることが、入門講座や新能の申し込み者の数で想像可能であります。本当の意味で、明治以来、能楽界を支えてきたと見られる「お稽古をする素人衆」の後継者不足は深刻な問題であります。

能楽連盟は、まさにこの層の上に集結した組織であり、能を見るだけでなく、謡い、舞うことを趣味とする人々の集いでありますので、連盟の活動を活性化し、組織を強化するためには、謡曲、仕舞を自演する愛好者をふやさない限り先き細りする運命にあるといわなければなりません。

残念ながら、昭和四十年代までは、各大学で、かなり活発であった能楽研究部や謡曲部のようなクラブ活動も今や衰退し、関東周辺では、わずか数校しか命脈を保っていない状況であります。

職分の先生方の教えておられる社中でも、ごく一部を除けば平均年齢が六十才以上であり、かつ新しく習おうとする入門者の数がふえていないのが実態ではないでしょうか。

勿論定年退職者の、六十の手ならいで入門される方々も大歓迎であり、これからは第二の人生の生き方が、高齢化社会の到来で大きくクローズ・アップされても参りますので、指導的立場をもっている連盟の会員が、地域社会で入門指導に総力をあげてたずさわる必要があると思えます。

横浜能楽堂という、文字通り一大拠点を確保した私たちが、それから二十一世紀にむけて、何をなすべきか、といえば、地道に仲間をふやす努力を、あらゆるチャンスに行うしかないと考えます。

連盟は、横浜市内はもとより、神奈川県内から東京をはじめ、近県一帯の愛好者を鳩合し、能楽堂を足場として、能ファンの拡大と、謡曲仕舞の普及のため全力をあげて努力すべきであると考えます。

能は永遠であり、日本文化の最高水準を示すものとして、これからも、全世界で高い評価をうける総合舞台芸術であります。私たちは誇りと自信をもって、五十年の歴史の上に、より一層の発展をはかるべきであると信じます。

横浜能楽連盟主催の新事業 〈五流交流大会の開催〉

常務理事 富久謡会 鈴木 力雄

去る二月二十日の理事会で横浜能楽連盟は、平成九年度の新たな主催事業として「五流交流大会」を開催することを決めました。

横浜能楽連盟は、すでに愛好者による「五流合同横浜謡曲大会」を主催しております。昨年の第十二回大会は、完成したばかりの能楽堂本舞台で「横浜能楽堂舞台抜き記念大会」として開催いたしましたところ、出演希望者が多く番組編成に大変な思いをしました。しかしそれも出演者一同の大きな感動、喜び

の声で報われたのでした。
新事業は、この感慨をさらに多くの愛好者と共にしたいとの願いによる企画であります。

他方、横浜能楽堂が主催する各種事業の見学希望者には若い方々が多いとのことですが、単に見聞される若い方々にもう一步、演ずる場に踏み込ませる努力が求められていると思います。能楽堂の本舞台で、日頃の稽古、精進の成果を披露できる場のあることが、このような若い方々への刺激材料の一つにでもなればとの思いで、新企画の「五流交流大会」が役立つことを願っております。

また、連盟に加入している団体の数は五十余りですが、巷間同好の人々が集まって楽しむ会はこれより遥かに多いと思われまます。個人会員は三百名弱ですが、箇々に楽しんでおられる方々はおもったと多いはずで、これらの団体、個人と各流派の連盟役員とが連絡を取り合うことにより、沢山の人が五流交流大会に参加されますよう期待している次第です。

なお、「第一回(平成十年)五流交流大会」の開催予定は、つぎのとおりです。

日 時 平成十年二月七日(土)
十二時~十七時
場 所 横浜能楽堂本舞台

幹事担当 (観) 梅若

(注)平成九年度の行事ですが、開催年が平成十年に入ってからですので、名称を「第一回(平成十年)五流交流大会」としました。

平成九年度

第四十五回横浜能の二案内

(横浜能楽連盟)

横浜能楽連盟主催の今年度の横浜能は、来たる十一月一日(土)と十一月三日(文化の日)の二日間亘って、開館二年目を迎えた横浜能楽堂にて開催いたします。

例年、横浜能は能楽五流の一流の能楽師を招いて出演して頂いておりますが、今年も観世流梅若会と金剛流の能に他各流の仕舞と狂言で、番組は左記の通り予定しております。今回の能

は良く知られた曲ながら謡曲でも習い物とされる劇的な難曲が組まれております。
今から熱い想いを寄せられてご観能くださるようご案内申し上げます。

第四十五回横浜能番組(予定)

初 日 十一月一日

(午後一時半開演)

仕舞 観世流梅若会

能 景 清 梅若恭行他

狂言 (未定)

仕舞 観世流

能 殺生石 梅若六郎他

第二日目 十一月三日

(午後一時半開演)

仕舞 宝生流

金春流

喜多流

狂言 伊文字 山本東次郎他

能 俊 寛 金剛永謹他



能 景 清

久良岐能舞台の近況

横浜能楽連盟副会長
久良岐能舞台世話人

高岡 幸彦

横浜能楽堂が完成して久良岐能舞台は大分影が薄れた様ですが、久良岐能舞台も地道な活動をしておりますので御報告致します。

久良岐能舞台は従来磯子区の管轄にあり磯子区長を長とする運営委員会に能楽連盟の代表及び区内能楽関係者等が参加し、館長が事務局長となり運営されて参りましたが、昨年横浜能楽堂完成により文化振興財団の管轄となりました。従来の運営委員の内能楽関係者は引き続き世話人としてお手伝いする事になり、その代表に能楽連盟の推薦でなられている浦部 毅氏が選ばれております。

平成八年度は従来の継続として「教室事業」と「能楽講座」が実施され各流の指導が初心者を対象として行われました。

平成九年度も同様に「教室事業」と「各種講座」が行われる予定です。「教室事業」は既に募集を終わり、四月には各流毎に教室が開かれます。又、平成九年度の講座は七月に「能装束の公開展示と説明会」、九月に「能楽の歴史と知識の講座」「虫の音を聴きながら古典芸能を楽しむ夕べ」又十年二月には

「能を楽しむ観るための講座と実演」等が予定されております。尚、かつて館長を勤められ、八年度から館長代理を勤められた高澤昭博氏は健康上の理由で本年一月一杯で退任され、後任に観世流田辺竹生師門下市川雅己氏が就任されました。

謡曲基歌集をまとめて

宝生流 門脇 達祐

昨秋、宝生流謡曲基歌集という小冊子をまとめてみました。宝生流謡本と対比して基歌を並べたものです。技術屋上りで、古典の素養の全くない者が、色々な謡曲集を参照しながら詩歌集によって基歌をチェックしてまとめた、お笑い草です。

学生時代以来の古書店あさりや図書館通いでしたが、歌集が見つからず残念だったのが「百聯抄解」(熊野その他)です。岩波の古典文学大系謡曲集上四四七頁にこの本の説明がありますが、古書店主でも「四、五十万円で出たのを見たことがある」という程度で、幻となりました。「詩人玉屑」(葛城その他)も、やっと袖珍本を見つけたら漢文の白文で、私には読み下すことができませんでした。「鞍七百首」(蟻通)という歌集も資料を見つけないことができません

んでした。この辺が素人の悲しさです。毛詩が詩経の異称であることや、吉水和尚は慈円のことである、なども発刊後に気がついたことでした。

白楽天の引用がダントツで多く、かの李白や杜甫が以外と少ないということも発見でしたが、平安時代以降の文学界に「白氏文集」等白氏の影響が如何に大きかったかを窺うことができませんでした。

私の通った旧制中学の校歌に「悠々架かる長橋は 南去北来まどかなる 旅路の夢を渡せども」という一節があり、少年の心をくすぐったものですが、「三体詩」を検索中に、杜牧の漢江という詩があって、南去北来人自老（南に去り北に来て人自ら老ゆ）という句が目にとまりました。おや、これが典雅だったのか、と五十年ぶりに判り、思わぬ余禄でした。謡曲十五徳に、はからずして校歌を知る、とでもつけ加えたい気分でした。

過日テレビで「悠久の長江三峡」を見ましたが、宋玉の「旦為朝雲、暮為行雨」（金札その他）とはこういう風景のことだったのかと興味も増したことでした。

詩経がBC四七〇年頃の書で、日本書紀が七二〇年、屈

原はBC二七〇年頃の人、人磨が七〇〇年頃の人。このような大昔の歌を、私達が普段何気なくあたりまえに謡っているということは、思えば面白いことです。

基歌集にはまだ落ちもありませんし、不徹底な面もありますが、リタイア後の楽しい作業でした。

謡蹟を歩く

梅若会 三谷 光子

今年の二月、仲間と湯河原に集い、新春の初謡いで楽しい一夜を過ごしました。

翌日朝、湯河原駅近くの成願寺に立ち寄りしましたところ、土肥実平一族の墓と七騎堂がありました。そしてここは謡曲「七騎落」の所であることを知り、早春の一日の旅に喜びが倍増したものでした。

謡曲に親しんでいる私たちが、謡曲の生まれ故郷が至るところにあることは知っていました。意識して足を運ぶということはありません。友人たちは大喜びで想いを胸にしばし佇みました。

私は改めて思い返してみますと、「小袖曾我」の小田原、「隅田川」の東京・墨田区、「放下僧」の横浜・金沢の瀬戸神社、「六浦」の称名寺、「江之島」の

藤沢、「桜川」の茨城・磯部など訪れています。

京都市内もいくつか行きまし。あちらにもこちらにも、京都は謡蹟の多いところですが、そのなかには「野宮」の舞台である京都・嵯峨野の野宮神社の柴垣や付近の竹林など、往時をそのまま思い起こさせるような跡が残っているところもあるかと思えば、「小督」の跡などのようにただ塔ひとつということもあって様々です。

自分が習った謡曲の場所に立ちますと、いろいろなイメージが湧いてきて、さらに謡曲に広がる楽しみの一つでもあることです。

新春の初謡いの友人たちと、この秋には「紅葉狩り」の場所を尋ねようと、今計画中です。十名ほどの仲間ですが、鬼女の集団などといわれないよう気をつけたいと思っています。

私が今後どうしても行きたい場所は「山姥」の新潟上路の山中です。三陸本線市振駅から歩いて八キロのその道を体力のあるうちに歩いてみたいのです。

終の趣味として、日々研鑽している謡曲ですので、自分なりの望みを持って、折にふれて謡蹟を訪れ、少しでも往時に思いが重ねられたらと思っています。

会員の声

稽古風景

観世流 棚橋 園成
県庁謡曲部

私どもは、名称のとおり神奈川県職員を構成員とします組織内文化活動サークルで、昭和三十年に謡曲部として誕生し、今年で四十二年目となります。現在、部員は八十余名の太所帯です。

私どもの稽古風景を説明もなく覗き見ますと、大人を相手にした寺小屋のイメージになるのでしょうか。

それは、師に向かって、老若男女をこき混ぜた弟子が座卓に正座し、師の謡いぶりを復誦している光景なのです。この手法を教室方式と称し、部員の入部時期に合わせて幾つかのクラスに分けています。また、個々のレベルに応じた練習として自主的にグループごとに工夫を凝らし、研鑽に励んでいます。

仕舞の稽古については、謡曲の進行状況を見ながら別室において個人習いによる指導を受けています。

日頃の稽古の成果を発表する場は、年四回のおさらい会で、夏は箱根が恒例であるが、あとは新築なった掃部山の能楽堂や久良岐能舞台を利用しています。

また、能楽への若い人たちの理解を深めるために、職員を対象とした普及事業を開催したり、開成町のアジサイ祭りや披露するなど伝統芸能の紹介に努めています。

小鼓のけいこをしませんか？

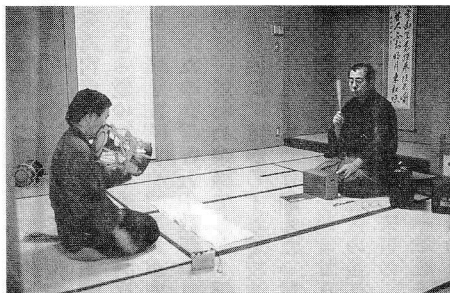
伊勢佐木町 白 牡丹 広井 徳平

明治、大正、昭和にかけて、伊勢佐木町近くにフェリス女学院第一期卒業生の丸井欽女史（幸清流小鼓名譽師範）が居られて、その姉娘こま子、妹娘文子（又はミツ子）の三代にわたる小鼓に限り横浜は幸清流一色と言われる位に盛んで、毎年春秋二回間根岸園（料亭）に先代宗家幸四次郎師を迎えて盛大な会が催されたそうです。

現在は十五世家元幸清次郎師（幸義太郎改め）が元の警友病院前神奈川県自治会館7階和室で小鼓の個別稽古をして居られます。写真は、その稽古風景です。初心者については、別の場所です。直弟子森沢勇司師（国立能楽堂囃子科第二期卒業生）が同様に個別稽古をしています。

近くこれを一ヶ所にまとめて、清次郎師には研修生専門に指導をお願いし（若手でも経験ある人を対象）、森沢師には数名づつのグループに分けて初心者専

門に基本の稽古をお願いしたら如何かと思って居ります。この件につき御意見御希望その他をお寄せ下さい。



小鼓の稽古風景

桜と狂女

金春流 宮川 木末

今年の桜前線はかけ足でやって来るらしい。

能の名曲には、桜が大きな役割を果たしているものが多い。花見ならなんといっても、「鞍馬天狗」「熊野」「小塩」は月下の花見、「西行桜」は夜桜が妖しく美しい。全山花の盛りの吉野は「嵐山」、そして「道成寺」「桜川」といったところだろうか。

寒気の中に凜と咲く梅とちがって、おぼろでだけだるい頃に咲く

桜はなまめいて、どことなく狂気を誘う。しかも花の命だから狂女がよく似合う。

能の「桜川」では娘の桜子は「幼き人」として子方に出てくるが、本当はいったい何歳くらいなのだろうか。というのも、謡曲を読むかぎりでは十歳以下とは思えない、今で言えればせいぜい中学生くらいの感じがするからだ。

桜子は、自ら身を売りに人商人のところへ行き、母親にその代金と手紙を届けてくれという人商人が尋ね当てた母親は、貧しい寡婦であった。手紙には「これを機会に、髪を下ろして仏門に入ってほしい」とある。つまり、娘は母の泥水稼業をやめさせてやりたくて、しかもそのためには自分が同じ道になるしかなかったのである。娘だけは杖に生きてきた母は「その子は売るまじき子にて候ものを」と嘆く。

三年が経った。娘を訪ね歩く母は、桜川のほとりにやって来る。折しも満開の桜は、川の上に雪のように散りかかる。その姿にわが身の上を重ね合わせるうちに、桜子に巡り合う。娘は尼となっていた。

援助交際などという言葉のなかった時代の、マゴギヤルのお話である。

“十四年目の主催県”
宝生流教授嘱託会

神奈川県 支部長 渡井 蘭子

宝生流には師の推薦により宗家から下りる「教授嘱託」という資格があります。先々代宝生九郎宗家が昭和十八年に流儀の一大発展を図るため創意発足され、昭和三十年宗家ご指導の下に宝生流嘱託会(昭和五十九年宝生流教授嘱託会と改称)を結成、全国組織で会員は約三千人に及びます。この資格を得た人は、夫々の支部会員となって活動することが望ましいが、現状入会は本人の希望なので、当支部会員数は百人を切る。全国大会の他に関東甲信越大会に参加しているの、十地区で十年に一度は主催県となる。当支部は昭和五十八年秋に熱海のMOA美術館能楽堂で主催して以来、横浜能楽堂の開館を只管待ち続け、本年十月七日(火)、十四年目で待望の横浜能楽堂を全館借り切って本部と両主催で、横浜能楽堂共催の下に「第三十回関東甲信越大会(神奈川大会)」を開催する。支部会員は、日頃行事に参加し難い方々も、ご健康の許す限り、記念にご協力ご参加を切望致します。素謡、仕舞と舞囃子一番の地味な会ですが、流儀を超えて応援とお遊びにお

能楽堂だより

七月、八月の公演

横浜能楽堂では、以下の通り公演を開催します。

「第三回普及公演」七月二十六日(土)午後二時。狂言「盆山」(和泉流 野村史高、狂言「鐘の音」(和泉流) 野村英丘、狂言「茸」(和泉流) 野村万蔵。正面二千五百円、脇正面二千円、中正面・二階千五百円。六月十四日(土)から発売。

「第四回普及公演」八月三日(日)午後二時。能「小督」(宝生流) 高橋勇、狂言「萩大名」(大蔵流) 山本東次郎。正面三千五百円、脇正面三千円、中正面・二階二千五百円。七月六日(日)から発売。

いずれも午後二時から会場。電話予約は午後二時三十分から。

「能の匠たち」日程決まる

三月から開催している公開講座「能の匠たち」の第五回、第六回の日程が以下の通り決まりました。

「第五回能面の巻」六月十五日(日)。午後一時、午後五時。

出演 能面師・二代堀安右衛門。

「第六回能舞台の巻」七月十三日(日)。午後一時、午後五時。

出演 魚津社寺工務店・稲子昭男。いずれも司会は葛西聖司 N H K アナウンサー。二千元(全席自由)。

電話予約(二六三)三〇五五、問い合わせ(二六三)三〇五〇。

編集後記

当連盟発足五十年。当時を知る人は僅かなようです。連盟では初期の歴史を発掘中です。古い資料や写真等について情報をお寄せください。

訂正

第十二号幽言の記事「能楽連盟の台所は火の車」の執筆者の肩書に誤りがありました。

誤 常務理事 原 博之
富久謡会
正 常務理事 原 博之
会計担当

お詫びして訂正します (M記)

横浜能楽連盟 連絡先

●文書郵送又はFAXの場合
〒233横浜港南区丸山台一丁目二九一七 新堀方
FAX 〇四五―八四四―二九〇三

●電話の場合

横浜能楽堂 佐藤正美

TEL 〇四五―二六三―三〇五〇